「日々の理科」（第 1402 号） 2018（H30),-5,-9

「シジュウカラの営巣（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

都会でも高原でも、樹洞性営巣のシジュウカラは、深刻な住宅難に陥っている。適当な巣箱を架けておけば、ほぼ 100%営巣するといって良い。

巣箱の中は、基本的に何もない状態で良い。北軽井沢の場合、４月の中旬頃になると、シジュウカラが巣箱の「内覧」に訪れる。来るのはオスが多いが、時には夫婦そろって、「物件」の品定めにやってくることっもある。

気に入ると、ものすごい勢いで巣草のミズゴケを運びこむ。水はけ、弾力、保温性などが最も優れているのだろう。北軽井沢では、巣草の９割はミズゴケが占めている。ミズゴケは、巣の床全体に厚さ３～４cm ほどになるまで敷きつめられていく。

ミズゴケの運び込みが終わると、今度は獣毛や、繊維が運び込まれ、一箇所に窪みが作られる。「産座」と呼ばれるもので、その窪みに毎朝１個ずつ、産卵が繰り返される。

最終卵を産み終わるまでは、昼は巣箱を留守にしている。これは、できるだけ抱卵時間を同じにする為だ。しかし夜間は、産座の上で丸まって休んでいる。

卵はとうとう 10 個になった。多いほうである。しかし昼は留守なので、まだ続けて産むらしい。